色　―color―

natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
色　―ｃｏｌｏｒ―

【Ｎコード】
Ｎ４７３１Ｋ

【作者名】
ｎａｔｕ

【あらすじ】
色々な性能を持った色々な人間。
色々な理由で集まった色々な人間。
何のために司るかはわからない女神は
何を考えているのだろうか。
色　―ｃｏｌｏｒ―

序？『石に変える少年』

少年は宿に泊まっていた。明日には、この村を出てゆかねば成らない。一年くらい続けてきた一人旅は、大人にとっては短くても十四歳の彼にとっては長かった。

食料は子供という権限を最大限に利用したり、媚びたりして手に入れ、宿代も一日働かせてもらう事でいつも稼いでいる。

しかし、今日だけは違った。優しい宿主が無料で泊めてくれたのだ。

「みなさーん、晩御飯の用意が出来たので十時までには召し上がってくださいね」

少女の声が小さな宿屋に響く。少年は驚いた。

宿主の子供だろうか。

部屋を出ると、声の主が微笑んでいた。

「あら、こんばんは。貴方が一人旅をしてる……リバース君？　凄い名前ね」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

少年は笑う。黒髪がその度揺れた。漆黒の瞳を輝かせて、リバースという少年はその声の主――少女を見る。

少女は、エプロンをつけていて、緑茶色をした腰までの髪と夜空色の瞳を持っていた。

「ありがとう、私はマーガレット。花の名前なの、よろしくね。ところで、君は何歳？　一人旅をしてるから、見かけによらず十六とか十八とかそこらへん？」

「ううん、十四歳」

「……嘘！　私もそうなの。驚くじゃない、嘘じゃ無いわよね？」

「嘘だとしたら、くだらな過ぎるよ」

「本当なんだね、凄い！　憧れるわ、晩御飯も奢りよ！　沢山食べていって頂戴ね」
マーガレットは、手を差し出す。
リバースは握手と思って、右手を差し出した。
だが――、その手を引っ手繰ってマーガレットは走り出す。
「急いで、美味しいご飯が冷めちゃうわ」
「うわわッ」
「ほらほら」
リバースは、マーガレットをまじまじと見ながら駆けた。

「マーガレット、シチュー持って行っておやり」
「はぁい」
「あ、ありがとう」
リバースの前に、パンとシチューにグラタンが並ぶ。
「さぁ、お食べ」
「うん」
リバースは、食いついた。久しぶりにとても美味しい料理に有りつけた。隣で、マーガレットが微笑んでいる。嫌な予感がする。
それは、大当たりだった。
「リバース、どうして旅をしているの？」
「ちょっと、身寄りが無くてね」
「そうなの？　じゃあ、もう少しここにいない？」
「あ……。マーガレット、ありがとう。だけど、いいよ」
「大丈夫よ」マーガレットは笑顔を崩した。「ここには孤児が沢山いるの。私だってそうよ」
マーガレットは、初めて視線を下にずらした。リバースは、罪悪感を感じる。
しかし、やっぱり踏みとどまった。

「ごめん、マーガレット。僕は一日しかここに居られないんだよ、ごめん。ごめん。それに迷惑を掛ける訳にはいかないし」
「リバース……迷惑なんかじゃないわよ。……リバース！」
リバースは立ち上がった。ご馳走様と言い、部屋に駆け足で向かう。
一瞬だけ、振り返るとマーガレットが泣きそうになっているのが分かった。

「マーガレット、どうしてあの子をここに誘ったんだい？」
「えっ……だって、あの子一人なんですよ。義理母（かあ）さん」
「？」
「ごめんなさい。勝手な事をして。でもあの子は若いし、それに義理母（かあ）さんの好みですし……どうでしょう？　後一日だけでも」
「……分かった。深くは追及しないであげよう」
「あ、ありがとうございます」
「ほら！　さっさと働きな！」
「はいっ」

リバースは布団に包まっていた。
――ほっておいてくれ、放っておいてくれ、無視して欲しい、いや無視してくれ！
……ここに居たって、幸せはやって来ないんだ。
そう考えているうちに、瞼がすっかり重くなってリバースは眠りについていた。

朝。
がちり。
嫌な音がした。リバースが、目を開けて扉に近寄るとマーガレットの声がする。
「ゆっくり眠って、ゆっくりしてから行ったらどうかな……？」

「？　でも、僕もう行くから――あッ！」
ドアノブが回らない。
鍵を閉められた。
やばい、やばい！　本気でやばいとリバーズは思う。
「い、今何時！？　開けて、マーガレット！　僕、行かないと！
僕行かなきゃ！　開けて、開けろ！　早く！　開けろ！　で、何時なんだよ！？」
「ッ、は、八時三十八分！」
「昨日来たのは！？」
「朝の九時前……」
「えっ！？　ちょ、早くしないと、一日たっちゃう！」
「え？」
「早く開けろよ！」
もう誰も失いたくないんだ。それが、赤の他人でも、リバースを助けようとしてくれるマーガレットも。
そこで、リバースは、二階だと思い出した。
「開けろ！　じゃ無いと、窓から飛び降りてやる！」
「……そんなに嫌なの！？　私達が嫌い？」
「違う――、っもう面倒くさい！　行くよ」
死ぬはずが無い。そう確信していた。何故かは分からない。
がっと窓を開けた。その音が、廊下にも聞こえていたのかは知らない。
しかし、扉がゆっくり開けられた。
「マーガレット！」
「……」
断念したのかと思った。だが、違うようだ。ばっ、と部屋に飛び込んできて扉を背にリバースを睨むマーガレット。
「じさつするつもり？　悪いけど人殺しには成りたく無いの、やめて。それに貴方に死んで欲しくない」
「だったら、そこを退いてくれ。そこを退かないと、君は大量殺人

者になる！」
「え？　どういう事？　混乱してるんじゃない？」
「してない！」
「落ち着いて！　……誰も咎めやしないわ。ゆっくり、おやすみ」
そのマーガレットの微笑みは、優しさでは構成されていないように見える。
リバースは、半強制的に畳み掛ける事にした。

「退け」
鞄から十五センチ程のナイフをひったくる。マーガレットは真っ青になった。
しかし、伊達に一人旅をしていたわけでは無い。この娘を傷つけずに脅すだけのつもりだ。服を軽く斬るくらいならば、容易い。相手が、無駄に動き回られなければ。
しかし、相手が動いたならその隙に出てゆけた。
後十分か？　後三十分か？　それとも、もうやばい？
「……リバース！？　わ、私を殺すつもり？　ね、ねぇ。私は貴方の味方だから、リバー」
「退け」
リバースはナイフを右手に持って鞄を左手に持ち、マーガレットに近寄った。
「冗談でしょう？　り、リバース。私は、貴方の事を！」
今だ。長袖をスパ、とリバースはナイフで切り落とした。
――そして、二人とも絶句する。
長袖の下の右腕は傷だらけだった。
「これ……は」
「見ないで」
マーガレットは、冷たく言い放った。
「一体誰が」
「嫌！　あ……そ、その。き、聞かないで。新しい傷じゃないの、

昔の傷よ。昔はよく虐められていたから」
にっこりと微笑んでマーガレットは言う。瞳が、にっこりとにっこりと悪魔を思わせる輝きを燈している。
しかし、マーガレットの傷は、新しいものだ。
「ねぇ」
「な、何よ？」
「女将さんにやられたの？」
リバースは、賭けに出た。違うなら、怒って隙を見せる。もしそうならば、彼女はリバースをおいて置いたらその虐待がリバースにも回ってきて少し楽になるだろうという考えなのかもしれない。またそこを突いたら隙が出来る。リバースが思うに、彼女はまだ純粋だからだ。
――そして、マーガレットは小さく頷いた。
「そうよ……、それがどうしたの？　だから、貴方を呼んでんじゃない！」
しかし、作戦は全部壊れた。
マーガレットは悪魔だった。
「あんたが代わりに受けたら良いでしょ？　虐待。そうしたら、そうだったら、逃げれる。みーんなみんな逃げ出したの。私だけ！私だけなのよ！」
「っ……どけッ！」
リバースは、ナイフを片付けてマーガレットを突き飛ばす。
そして、駆け出した。

急げ、急げ。もう何も思い残した事は無い。彼女は悪魔だった。
ほうっておけ……。
「ッ」
もう少しで、村の門だ。なのに足が止まる。
少しだけなら余韻を感じたい。そう思ったのが運のつき。
ぱちん、と枯れた音がした。

リバースは、真っ青になる。
ぴしぴし、ピシピシ。
そういって、地面が“石になりだした”。
「一日たった……ッ！」
「何だ、あれは？」
門番の声。
「な、何それ！」
いつの間にかいたマーガレットの悲鳴。
「うわぁっ」
誰かの悲鳴。
「きゃ、きゃ」
誰かの悲鳴。
「地面がッ、地面が石になってゆくわ！」
誰かの声。
誰かの……。
誰かの……。
ずっとここに居れば、この村は滅びる。
いっその事、滅びたらどうなるだろう。
僕の、この“一日そこにいれば、そこにある物を全て石に変える”力と共に、滅びろ。
そうすれば、僕も滅びるだろうか？　僕も、石になれるだろうか？
「何なの、あれは？」
誰かの……。
誰か……。
誰か……。
誰……。
誰……。
「ねぇ、ママ。この地面はどうして石に成ってるの？　触って良い？」

子供。何の罪も無い、子供。――リバースのよりも、幼い子供。
まだ純粋で、まだ生きてゆける子供。
ダメダ。理性が頭を殴りつける。
「……それに、触るなッ！　触っちゃ駄目だ！　石になるッ！」
リバースは叫んで村を抜け出そうと駆けた。
後一歩。
それを踏み出したら、パキンと何かが割れる音がした。
「あれ？　石が……」
「さ、触ってもどうもならないわ」
「なんだったんだ？」
「あの子、どこいった？」
「泣いてたぞ」
「泣いてたなぁ」

リバースは走った。
どこまでも。どこまでも。

そして、また。
少年は宿に泊まっていた。明日には、この村を出てゆかねば成らない。一年くらい続けてきた一人旅は、大人にとっては短くても十四歳の彼にとっては長かった。
序？『石に変える少年』おわり

序？『登場人物になりきれる少女』

「ちょっとー、今日中に“石になりかけた村”に行かないといけないの！　だから、早く開けて！」
「はぁ？」
少女は叫んだ。しかし、図書館長は呆けた顔をする。それはそうだ。まだ開館まで二時間以上ある上、昨日から噂の“石になりかけた村”にはどれだけ急いでも、二日は掛かる。
しかも、ここは図書館だ。急ぐ為に図書館に飛び込む人を彼は初めて見た。
「あの……名前は何て言ったかな？　お嬢さん。それに、何歳かね？　両方の質問にちょっと答えてくれるかな」
「私はセレシア！　セレシア・フェリス！　ぴっちぴちの十六歳よ」

「む、どこかで聞いたような？」
セレシア・フェリス。館長は不審に思う。腰まで流れる白銀の髪に、意思の強い真っ赤な瞳。そして百五十センチを超えるが百六十センチまではいかない身長。そこまでは何とも思わなかった。しかし。
「後一つだけいいかな？　……何だね？　その格好は」
彼女は、リュックを背中に背負っていた。それには本が大量に詰め込まれているが重そうにはしていない。それだけでは優等生で通ったかもしれなかった。石になりかけた村にレポート取りに行くから地図を見に来た、なんて言われたら信じてしまいそうな程に。
だが、彼女の服装で全部信じれなくなってしまう。彼女の服装はゴシックロリータ……つまりゴスロリだった。
黒いワンピースに白いレース。有り得ないほどのふわふわでごつごつした衣装。まぁ、似合っているからマシだ。

「えっと……か、館長さん。これには訳があって……そ、そんな変な趣味じゃ無いですから！」
「信じれん。帰れ、帰れ」
「えええ……。じゃあ、やむを得ません」
セレシア・フェリスは微笑んだ。
そして、リュックから白い縦十センチ、横五センチ程のカードを取り出した。
「セレシア・ニコレッタ・フェリスです」
「セレ……！？　ちょ、ちょっと待て！　このカードが示すのは」
「はい。世界全図書館最高権力者（せかいぜんとしょかんさいこうけんりょくしゃ）のフェリックス・ニコレッタ・フェリスの愛娘セレシア・ニコレッタ・フェリスと申します。セレリスと呼んで下さいね」

――――そして。
「館長」
「な、何だ」
「どうしてあんな小娘を通したんですか」
「うるさい、黙って言う事を聞け。お偉い様だ」
「へぇ、マジですか」
「あのー！　館長さぁーん！」
セレリスが大声を張り上げた。館長と司書は黙って駆ける。図書館の本棚だけの部屋でセレリスは座り込んでいた。
一冊の本を持っている。
「この本の登場人物に時空移動（テレポート）を使う魔女がいますよね？　その子って死にました？」
「いや……そのオチを言ってもいいのですか」と館長。
「言ってください。死ぬんですか」
「いや、右足を切断しますが最後には主人公に治してもらって一件落着です」

「そうですか」
セレリスは立ち上がった。
「絶対見ないで欲しいので、出て行っててください」
「ですが」
「命令です。あと、敬語使うの止めるのも命令です！」
セレリスは押し出すと扉を閉めて床に腰をおろす。そして、読み出した。

「館長」
司書が、締め切った扉を睨む。そして、重々しく口を開いた。
「もう一時間もこもってますよ」
「ああ、そうだな。何かあったのか……？」
朝は二人しか居ない。いつもならのんびり暮らすのだが、今日はセレリスが気になってサボろうにもサボれなかった。
その時。
「……あぁッ！」
掠れた悲鳴が上がった。館長と司書は顔を見合わせて扉を見る。そして、館長がノックした。
「セレリス様、どうかなされましたか？」
「きゃ、がっががががヴぁっがががヴぁヴぁヴぁヴぁッ！」
「セレリス様！？」
「うううううぐぐぐヴヴ」
「何を我慢してらっしゃるんですか！？」
「開け、あぁあああああっ！　開けるんじゃ無い！」
館長は息を呑む。しかし、司書も彼も困惑を抑えられず、心配が心を掻き立てた。
つまり、扉のノブに手を掛けたのだ。
がちゃん。がちゃ……り。
「セレリ――」

「来るな、とあれ程言ったのに！」
セレリスは、リュックを下ろして床に寝転がって本を読んでいた。視線を一度も本から離さない。
館長はその姿勢を注意しようとして止めた。
止めるしか無かった。
ゴスロリの服が消えていた。代わりに、異国の魔女に似た服を着ていた。しかも真っ黒なローブに真っ赤な血が付着している。頭に付ける花飾りが魔女には不似合いだったが、セレリスの白銀色をした髪にはよく栄えた。
「……その血は本物ですか？」
そこで、館長は思い出す。その格好は右足を切断した魔女の格好と瓜二つなのだと。
「おい……セレリスさんの右足は繋がっているか？」
「怖い事、言わないでくれますか？　繋がってますよ」
司書が答える。だが、二人の位置からは右足はローブで見えない。
セレリスは力無く微笑むが、しかし、視線はやはり本で、素早く視線が動いていた。
司書が、問答無用で近寄る。その時、一瞬だけ視線が止まった。だが、すぐに進みだす。司書は、躊躇わずに後ろに回ってローブを少し捲った。
司書が、首を館長に向けた。館長は、唇を噛んで司書の方に駆け寄る。そして、右足を見て眉を顰めた。
「斬れてる……ここまでして、その登場人物になりたかったので……のか？　セレリスさん？　そんな事をしても……医療術を操る主人公はここには居ない」
「かん――」
「だから黙ってそこに座っていて下さい」
「！」
司書が、困惑した表情で館長を見る。館長は、ため息をつくと司書に命令した。

「黙って座っておけ。私に考えがある」
「は、はい！」
「すぐ戻ってくる。いいな」
館長は、部屋から出て行った。司書は安心した表情で座り込む。
セレリスが、司書に声を掛けた。
「後何ページ程で回復？」
「ああ、二ページ程でエンディングですからすぐですよ」
「良かったわ、本当に良かったわ」
セレリスは瞬きして本に集中した。
沈黙が部屋を満たす。そしてセレリスが安堵した表情でつぶやいた。

「やっと治る」
その時、突然光った。何が？　セレリスの体が。そして、さっきまで離れていた右足が浮かんだような気がした。　気がしただけかもしれない。次の瞬間、司書は床で寝ていた。
「う……」
「お、おい。無理に起きるな」
「館長」
館長が優しく微笑んでいた。隣では申し訳無さそうにセレリスが座っている。
「き、気絶したんですよ。司書さん」
しょんぼりするセレリス。他人を傷つけるのが嫌なのだろうか。それとも、身勝手な他の理由か。
館長は、司書の体を隈なく診たが異常は無かった。
「うん、ただの気絶だな。ショックのあまりだろう」
「はい……あ、セレリスさん。救急車は？」
司書が尋ねるとセレリスは首を横に振って立ち上がった。そして、右足を軸にして嬉しそうに回る。
右足を――？
「せ、セレリスさんッ。右足が」

「治りましたよ。だって、本を読んだんですから」
「か、館長の奥の手はこれだったんですか？　よく分かりませんが本を読んでいるうちに医者でも？」
「いや、私は何もしとらん。ただ、落ち着かせるための嘘だ。考えなんて無い」
館長が言い切った。こういうところだけは尊敬に値する。
そして、セレリスは、
「私、本の登場人物になりきって本を読んだらその人と一心同体になるんです。だから、作中で足を切断した時……私も切断されました。そして、治ったときは私も治りました」
というわけを説明した。有り得ないが、見てしまったものは仕方が無い。本当なのだろう。

「じゃあ、私行かないといけないので」
セレリスは微笑んでリュックを背負った。そしてローブがはためく。
「時空移動（テレポート）！！　石になりかけた村へ！！」
「ちょ」
また光った。これが夢で無かったら何というのだろうか。
……現実、なのだろう。

セレリスは“降り立った”。
目の前には見た事が無い素朴な村が広がっていた。時空移動（テレポート）したのだ。有り得ないような話だが。
「こんにちはー、そこのお嬢さん」
「はい？」
緑茶色の髪と夜空色の瞳を持った少女が振り返った。人の気配がかなり少ない村だ。
「ここに、リバースとか言う少年いる？」

「リバース……ああ、いましたよ。どこかへ行ってしまいました」
「そうなんだ。もーやだな」

少女は急に目を輝かせた。
そして、溌剌(はつらつ)とした声で言う。
「私、マーガレットって言います。お花の名前ですよ。その、私の宿で泊まりませんか？　一人旅の子供は無料なんですよ」
「え！　無料？」
セレリスは一瞬心が揺れた。が、すぐに思いとどまった。別に、無料(タダ)程恐いものは無いとかそういう思いでは無い。
簡単な思いだ。
「ごめん、私もう行かなきゃ」
「どうしてですか！」
「追いかけるの。リバースとかいう奴を」
「こ、恋ですか」
「違うわよ、私の本達を石に変えやがった事、死ぬまで悔やめ」
それはリバースに向けたのだが、マーガレットは恐くてそれ以上勧誘できなかった。セレリスは絶世の美人なのだが、漲(みなぎ)る怒りに誰も近づかない。
「最寄の村に行ったんでしょうね。追いかけてやる！」

「ちょっとー、今日中に“石になりかけた村”に行かないといけないの！　だから、早く開けて！」

『登場人物に成りきれる少女』おわり

序？『登場人物になりきれる少女』（後書き）

どうでしょうか。セレリスはお気に入りでもありますが、このキャラより遥かにお気に入りなキャラが次回……！！

序？『観客席の男』

「あーもーセレリス……セレリスセレリス！」

彼は五階建てのビルの屋上から彼女を見ていた。そこは、都会と呼ぶのにはまだビルの高さが低く、田舎と呼ぶにはビルが多すぎる所だった。

彼のいるビルは、その中でも低い。ビルにしては低い。だが、空が拝めるし田舎風な雰囲気もする。

彼はそこを気に入っていた。理由は簡単。

彼女をじっくり見れるからだ。低すぎれば感づかれる。高すぎれば目視できない。この高さが良いのだ。

「“セレシア・フェリス”……ブラコンじゃねぇんだろ？　恋してるわけでもねぇんだろ？　じゃあ、どうしてリバースとかリリースとかいう奴を追っかけてんだよ」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

彼は、ぼさぼさの黒髪に手を突っ込んだ。悪餓鬼風なジャケットに迷彩柄のズボン、それにピアス。ピンクサファイアといい、かなり綺麗な本物の宝石である。

そんな格好では金髪の方が似合いそうな気もするし、その上、わりと彼は顔は格好良くて格好に合わない。瞳もカラーコンタクト等せず、黒い瞳だった。

「セレリスー」

彼は、十六やそこそこ程の年齢にもかかわらず、ライターと煙草を取り出して火をつけた。

そして、屋上から下をうかがう。彼の視線の先には、白銀色の髪を持ち真っ黒な魔女の姿をしている異質な少女がいる。

その少女はなぜかよろよろだった。

「疲労がたまってるのかな？」

彼は煙草をふかす。そして口にくわえた。

それから、その少女を凝視する。少女は、道のど真ん中で転んだのだ。
まさかの、車道で。
無理に横断しようとしたのだろう。周りの者は驚くがすぐ立ちあがると思って助けない。いや、助けに行かない。なぜか？　それは、後一分もせずにトラックが車道を駆け抜けに来るからだ。
少女にも見えている。まだ歩道に近いのでぜんぜん平気な距離だ。
しかし――彼女は動けないようだった。疲労がたまって立ち上がれない。その上、頭が車道に出ている。
死ぬ。つまり、そういう事だ。　あの位置では運転手にも見えず、頭を轢かれてしまう。
「うそだろーっ」
青年は闇雲に屋上の柵を越える。
少女は、焦って立ち上がるがまた転ぶ。誰も気付かない。
彼女は諦める様子も無く、息も荒々しく立ち上がろうとするが失敗。そこで、彼は微笑んで、“屋上から柵を蹴って飛び降りた”。
「ひゃっほぅ！！」
「！！」
すぐに着陸。それも、両足でどん、と。骨折諸々起こっても良さそうだが、彼は笑顔でまた“駆ける”。
だが、後十秒もすればトラックは彼女を跳ねる。トラック運転手は気づかない。歩行人も大丈夫だろうと気に留めない。少女は動けない。
確実に跳ねられる。なのに、彼は彼女へと駆ける。
「……げ！？　嘘、なんで！？　なんでいるの、たちば――」
彼女は驚いて叫ぶ。
しかし青年は。
「霧咲（キリサキ）で良いって！」
青年は彼女へと走る。そのまま、思い切り地を蹴って倒れこむか

のように少女に覆いかぶさった。

――普通なら、即死。トラックは速度を少しだけ緩めて彼等を跳ねる、それが普通だ。普通ならば。

おかしな摩擦音、運転手の悲鳴、周りの悲鳴。そしてすぐに安堵の声や息。

少女は、彼の体温に包まれながら息をゆっくり吐いた。

彼は、何事も無く笑って“立ち上がる”。

そう、立ち上がった。

目の前には、安堵する少女と、向きを変えて歩道に突っ込んでいるトラック。

歩道者は丁度居ず、誰も彼もが無傷だった。

「何で……何でいるの。橘、霧咲」

周りは一つの怒声と多くの歓声が広がっていた。

「あの……大丈夫、ですか？　その恋人さんと……貴方」

運転手や野次馬が尋ねてくる。恋人と言われて少女は怒ろうとしたがその前に、橘霧咲という青年が否定した。そして笑顔で答える。

「“妹”です。運転手さんの機転で助かりました！　ありがとうございます。では」

「きゃ」

霧咲が少女――セレリスの腕を取って駆け出す。しかし、疲労が溜まっているセレリスはもたついていた。霧咲は何も考えずにセレリスを引っ張っておんぶし、駆ける。

かなり速い。

「ちょ。何で……何で毎回助けてくれるの？　妹だなんて嘘までついて」

「お前を愛してるから」

「は？　冗談止めてよ」
「いや、本気。恋してるんじゃない、愛してるんだ。妹として！」
「だから妹じゃ無いわよッ！」
セレリスは駆ける霧咲の頭を叩いた。
霧咲はまったくダメージを受けずに笑ったまま。
そして言う。
「無駄な力を使うな、馬鹿。せっかく運んでやってんだ、感謝しろ」
「降ろしなさい、どうして私なの？　私なんか助けなくても良いじゃない」
「仕方ないじゃねぇか」
「何で？」
「……俺の“異質”を認めてくれたから」霧咲は微笑む。「愛してる。妹として」
「ばっかじゃ無いの？　って、妹じゃないってば！」
霧咲は足を止めた。
都会の狭間にある公園。さびていて人気も無い。そこのベンチにセレリスは降ろされた。
「ちょいと休憩」
「異質って……“影響を与えるクセに影響を受けない”だけでしょうが。慣れてるのよ、それくらい」
「だろうな」
霧咲は、公園の滑り台を駆け上る。そして一番上にある柵によじ登った。危なすぎる。
そこから、一センチ程しか無い柵の上で仁王立ちする。高さは二メートルか三メートルくらい。
危ない、とは誰も言わない。落ちて頭を打てばしぬのに。
「もしここから落ちても――」霧咲はもし、を現実にした。落ちる。
「まったくの無傷」
「……ええ」

「もし」
綺麗に着地し、手のひらサイズの石を拾う霧咲。
「これを思い切り頭にぶつけてくれるか？」
「いいわ」
セレリスは近寄ってきた霧咲から石を受取って間髪いれずに頭に向かって投げた。
だが、セレリスは上半身だけ起き上がらせている不安定な状態なため、顔面に当たる。
――しかし、無傷。かすり傷も無い。
「化け物だろ？　何があってもダメージは受けないこの力……」
「ねぇ、訊くけど」
「ん？」
「何でさっき、トラックの向きが変わったの？　ぶつかると思った」
「……仕方無いじゃん」
霧咲は右手をセレリスの頭の上においた。
夕焼けがぼんやりと輝く。
霧咲は微笑んで言った。
「俺だよ、半径二メートル三十センチ内の物くらいなら変えられる。だから、お前を今すぐころすこともできる」
「……」
「こうやってな」
するり、と右手を首の位置に変えた。一瞬力が篭ってセレリスは驚愕する。
が、反対に疲労がするすると抜けていった。
その代わりに、どんどん眠くなっていく。
「あ」
「Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ．ｓｉｓｔｅｒ」

「誰が、妹よ……」
「ばれた？」
「ばれ……るに……きま……ってる」
「おやすみ」
今度は日本語で。セレリスはこくん、と首を傾けた。眠りについたらしい。
霧咲は少しだけ自分の右手を見て、それからギュッと握り締めた。

そして、愛しそうにセレリスを眺め、自分のジャケットをゆっくり被せた。黒いTシャツになった彼は、呟く。
「寝かしつけたのは初めてだな……よし、この隙に」
霧咲は心の奥では自分を信じて眠っているであろうセレリスを見た。そして髪をかきあげる。それから、自分の左のピアスを外してセレリスの左耳につけた。
影響させる。穴を開けなくともセレリスが願わない限りピアスが外れない、という影響を与えた。
それから、ゆっくり頭をなでてやり、歩き出した。そして、そのまま駆け出す。
またどこかで見ている事だろう。彼女の為に、自分の為に。

「“セレシア・フェリス”……ブラコンじゃねぇんだろ？　恋してるわけでもねぇんだろ？　じゃあ、どうしてリバースとかリリースとかいう奴を追っかけてんだよ」
ぶつぶつ、ぶつぶつ。
彼は、ぼさぼさの黒髪に手を突っ込んだ。悪餓鬼風なジャケットに迷彩柄のズボン、それにピアス。ピンクサファイアといい、かなり綺麗な本物の宝石である。
そんな格好では金髪の方が似合いそうな気もするし、その上、わりと彼は顔は格好良くて格好に合わない。瞳もカラーコンタクト等せず、黒い瞳だった。

「あーもーセレリス……セレリスセレリス！」

『観客席の男』おわり

序？『観客席の男』（後書き）

どうでしたか？w

霧咲は使いやすくて好きです。

序？『史上最悪最善姉弟』（前書き）

少々長いです。

序？『史上最悪最善姉弟』

「警視」
彼女が警視である事はあまり知らされていない。
なぜか？　それは彼女の三つ下の弟が犯罪者だからだ。
そして彼女の実家は“無い”。昔、大犯罪者がきて潰れたとかいう話だ。その犯罪者の手助けを弟がしたらしい。かなり、積極的に。

姉の彼女は、死に物狂いで逃げ出したのだった。
「何だ？」
それから、彼女は異例だった。キャリアでも二十九歳で昇格する警視に、たった二十一で昇格してしまったのだ。
だから、年上の部下達は歯痒い思いで彼女に従っていた。
「大事件解決おめでとう、警察の顔が立つのは君のお陰だ、と警視総監から」
「いちいち褒め称えんでも良い、と伝えておくべきだったな……いつもいつもそこまで褒めんでも」
彼女は一瞥もせずに答え、長い廊下を歩みだした。
ブラウンのふわふわ髪は胸まで伸び、彼女の小柄な身体を目立たせている。威厳のある黒い瞳は聡明さを引き立たせている。
これでもノーメイクだ。つまり、素顔なのに綺麗だという事である。
「私は少し屋上で休みを取る。次の仕事内容を教えてくれないか」
「えっと……弟様を捕まえる為に会議を」
「じゃあ良い。私は休んでいるから代わりに出てくれ。じゃあな」
「……はい」
彼女は、階段を上って屋上に出た。警察から見た空も青く、澄んでいる。
彼女はにっこり微笑んで一個だけぽつん、と置いてあるベンチに

寝転んで眠り始める。
「風成(ファナ)警視！　起きてくださいってば！」
「……け、警部？　す、すまない。熟睡していたようだ」
もう空は夕焼け色に染まっていた。起こしにきた警部は溜息をついて隣に座る。
痩せた、男だった。
「――貴女の弟を捕まえる為にグランドエスカートに宝石がある、しかもとっても綺麗な宝石がある。というガセネタを流すことにしました。あ、グランドエスカートってビルです」
「ふうん、それで？」
「密告なんてしないで下さいねって皆思ってるみたいです」
「無論」
風に成るとかいてファナと読む、凄い名前の彼女はゆっくり笑みを描いた。
そして、警部との距離を少し縮めて下から表情をのぞく。
「私を信じてくれ」
「わ、わかりました」
「ありがとう」
にっかり、と笑う彼女を見て赤面する警部。風成は、少しだけそこに居る事にした。警部はそそくさと立ち去ってしまう。
風成は、その背中を見つめながら携帯を開けた。
「もしもし……空成(くうせい)？　元気してる？　えっとねぇ……そうそう、グランドエスカート。　一応、“ガセなんだけどね”。久しぶりに会いたいし、おいでよ。うんうん、そかそか。でも――」
風成は一瞬で表情を明るくした。
「うん、分かった。じゃ、またね！」
そして、即電話を切る。
しかし、また掛かってきた。

びっくりしながらも取る風成。
「……く、空成？」
『ごめん、“霧花（きりか）姉さん”。やっぱり、グランドエスカートには行けない』
「どうして？　っていうか、何で私の“本名”で呼ぶわけ？　一応、風成通してるんだから。あえて変な名前にするとさ、皆信じてくれるんだよね。で、どうして？」
風成、いや霧花は言った。
電話の相手は申し訳なさそうに言う。
『前から好きな子がいたとは言ってたんだけど、覚えてる？　その子を見張ってるんだ』
「何馬鹿な事してんの。ストーカー？」
『まぁ、そうだね』
笑い声が携帯を通じて聞こえてきた。
霧花もふっと微笑む。そして軽い声で言った。
「じゃあ、仕方無いね。好きなだけ、尻尾追いかけておいで」
『その尻尾が立ち止まってくれる事を願うよ』
「死なせないように、護りたいんだろう？　馬鹿だねぇ」
『あははは。で、霧花姉さんはどうするの？　グランドエスカート」

「うーん」
腕時計を見て、それから上を見上げる霧花。
そして、呆気無く言い切った。
「どうにかするわ」
『ねぇ、この会話……誰かに聞かれてたらどうする？」
「どうにかするわ。ところで、ごめんね」
『何が？』
「犯罪者の罪、全部アンタに押し付けちゃって」
『気にして無いよ、俺よりも』
霧花は黙って電話に耳を傾けた。

『霧花姉さんが犯罪者とか言われて、傷つけられるのは嫌だしさ』
「そう、ありがとうね、“霧咲”。で、好きな子の名前は？」
『あはは、セレリスっていう。セレシア・ニコレッタ・フェレス。あの有名な図書館の人の、娘』
「ああ。……良い名前だね」
『ありがとう。俺が褒められてるみたいで、嬉しい』
「一つだけいいかしら？」
霧花は少し微苦笑しながら言った。
「そういう他人主義なのは少し止めてみたら？　自分の事も考えよ？」
『ごめん、霧花姉さん。俺には……出来ないんだよ。周りと同じ空間同じ世界観同じ考えになる事が。だけど姉さんと彼女だけは……切るよ』
「え」
ぶちッ！　と嫌な音が耳元でした。霧花は顔を顰めて携帯を落としてしまう。それを落下する前に拾い上げ、彼女は少し安心した顔になった。
弟から貰った、大事な携帯だった。
「……？」
突然切られていい気はしない。不審に思っているとメール音がわんわんと鳴った。急いで開けると、やはり最愛の弟からだった。
【ごめん。今、警察に追われてる。捕まったら色々とセレリスから離れてしまうので逃げるよ】
その文面を見て霧花は目を見張った。少し文章がおかしい。焦っているのか。
久しぶりに感じた弟の焦りは、姉の心配へと変換されてゆく。
【大丈夫？　私が何とかしてあ】
「風成警視！！　犯罪者空成を発見しました！　捕らえに参りましょう！」
「え！？」

さっきの警部が叫びながらやってきた。目がきらきら輝いている。霧花……いや、風成はちらりと携帯を、一瞥してから何も言わずに――途中だったが――送信してポケットに突っ込んだ。

警部に言われるままに警察を離れ、人の多い都市の中心部に着いた。ところどころで叫び声があがっている。

「……警部」

「何でしょう？」

「彼は――弟はどこにいる？」

「もう少し奥です」

少し急いで走った。瞬間的に警部は見えなくなった。足の遅い警察はこれほど役に立たないとは。ふと隣を見ると、全速力の自転車に追い越された。色々とむかついた。

だが、それどころでは無い。

「警部ッ！　走るのが遅い！　さっさと走れ！」

「すみません」

いちいち立ち止まって謝る警部を睨みつけ、風成は全精力を五感に費やした。人々のざわめきが意味となって頭にめぐってゆく。大事な情報は無いか。大根の安さ等どうでもいい。警察への不満もどうでもいい。

その時、突如鼓膜を突き破るような綺麗で通った声が聞こえた。

「あいつ……ッ、捕まったら私がどうなると思ってんのよ……助けるなんて柄じゃないけど……まぁいいわ。特別ということで」

小さな声だった。微かな声だった。だけど、聞いてしまった。聞こえた方を向くと、銀髪の少女がなぜか着物を着て立っていた。

風成は迷わず近付いてゆく。

「警部も検索を頼む。判断は任せるぞ」

「はい！」

「迅速にな」

近付いた事に気付いたのか、少女はバッと真っ赤な目で風成を睨んできた。警察だとばれているに違いない。

出来るだけ優しい笑みを浮かべながら風成は言った。
「始めまして。貴女、セレリスさん？」
「それがどうか？」堂々たる返答に、風成は惹かれる。
「セレリスさんだろう。ところで、追われてる人がどこか知ってるか？」
「知らないに決まってるじゃないですか。突然なんですか？」
鼓膜を突き刺すような声が、風成には通用しない。その声音の奥には暖かい声が混じっていたからだ。風成は、少女――セレリスの腕を引く。
セレリスは一瞬だけ驚愕し、それから振り払おうとした。強く振り払った為、コートに強く腕が当たった。
コン、という音がして、セレリスは真正面から風成を見た。
「この音はッ！　物騒でしょ、こんなに沢山ッ」
「どうでもいいわ。着いてきなさい」
「――き」
悲鳴を上げようとしてセレリスは押しとどめた。風成はここぞとばかりに腕を引いて路地裏へと駆ける。誰もいない路地裏は、表の騒ぎのせいで内緒話には最適そうだ。ちょっと声を荒げても、誰も気付かない。一方が警官という事で、怪しまれない。

「何にも知りませ」
「貴女は彼の事、どう思ってるんだ？　彼は貴女の事を恋人か妹に見てる。どっちかというと……片思いだろうな」
「！！」
どうして知っている？　という目でセレリスは風成を見た。その頬が少し桃色に染まっている。まぁ、普通の反応だろう。風成は続けた。
「同じ血が流れている訳でも無いのに、彼を異能として見ない。れっきとした人と見てくれている。恐れずに向かってくれている。そこに恋心を抱いてしまっているのだろう。妹にしたい、って言った

事はあると思うけどさ。まだ、告白は取っておきたいのかしら、あの子は」
「好きだ好きだ、とかなら聞いた事ありますけど」
「真の告白じゃ無い事くらい、理解しているでしょ？」
「そ、そりゃあ。弄られてる事ぐらい……って何なの！？　警察ではそんな事さえ分かってるの？」
「違う」
一瞬霧花になっていた自分を叱りながら風成は微笑む。
そして、言いたかった事を告げた。

「私は彼の姉なんだ。知っているか？　彼は殺人者で泥棒でもある。でも本当はただの泥棒だ。なのに……あのね私の実家は、小さなその町ごと崩壊したの。住民の大抵が重傷か死亡よ。でね、それを彼がやったって言われてるの」
「え？　姉？　殺人者？　泥棒は知ってたけど、え？」
「安心して。彼は手伝っただけ……手を下したのは、“私だから”」
「――人殺し……ってわけ？」
「そ。私は空中戦が大得意な、殺戮者（スレイヤー）なの。それでいて今は警視よ。一般人どもは騙されるのがかーんたん。私が潮らしく泣いていれば孤児院にいれてくれたわ。私がそれらしく警察になるって意気込んだら応援してくれたわ。定期的に警察に行ったら顔を覚えて貰ったわ。後は体力と知力を見せ付けてやればいい。意気込みを見せればいい……あああああああああああ、脆すぎるわね」
「壊れてる……」
セレリスは初めて、一瞬だけ怯えた。しかし、風成……霧花は力尽きたような笑みを浮かべるだけだ。
殺戮者（スレイヤー）で、警視。むごたらしく多くの人を殺す殺戮者（スレイヤー）、それに善を尊ぶ警視。ばらばらすぎてイメージが浮かんでこなかった。壊れてる、というのは的確かもしれない。

「でもね、セレリスさん。今は……霧咲を優先すべきだから、ここでの“独白”はおしまい。さ、霧咲はどこ？」
「三法王のビルの屋上で戦闘してみたい、って言ってました。だから、そこ付近から離れるなよって」
「三法王！？　高いビルね。一番高いかしら」
「いえ、一番はレヴィヴィンです。普通ですよ、三法王は」
「そうだった……わね。じゃあ、行ってくるわ」
霧花は走った。ぐんぐん進む。そして、三法王の高層ビルに駆け寄り、その壁を“駆け上がった”。人目等気にしない。瞬きしてる間にその姿は消えてしまって居るのだから――。
屋上では霧咲と警官十名程がいた。銃を構える五人、警棒を構える五人。後から援軍がやってくるはずだ。こっそり警官の後ろから上がりつつ、その中に警部を見かけた。
「……」
「！」
霧咲がこちらに気付くと同時に、地面を蹴る。高くあがって太陽から斜めに平行へ。
後は、“昔と同じ”。
「やっと来たな！」
「おわ！？」
振り向く警官には逆光で顔は見えない。警棒を持った五人に、霧花はコートから“ナイフ”を取り出して投げた。肩肩腕。一人外した。驚きながら銃を持った警官四人と警部一人にも投げる。横腹腕、横腹腕、腕。警部のはわざと腕だけにした。
「んな……ッ」
全員がうめきながらこっちを見る。そこを、霧咲が蹴りで一網打尽にした。しかし、警部だけがすわったままだ、他は気絶している。
「けけけけけけ、警視……」
「情がうつるなんて、駄目ねぇ。全く」
「良いと思うけど」

「黙ってて、霧咲。警部」
「は、はいぃ？」
震える警部に風成は言った。
「さようなら、貴方が警視になる暁には祝品を送ろう。ただし、脚が速くなっている事を強く望む」
「あー警官辞めるんだぁ」
霧咲が詰まらなさそうに言う。
「仕方ないでしょ。セレリスちゃんが可愛すぎてさ、ちょっと応援したいなぁ。なんて」
「け、警視」
警部が言った。
「敵だったんですか！？」
「……そうだけど」
「！？　姉さ」
「……警視」
「？」
警部は微笑んだ。
「警視は、敵に拉致されてしまったのですね。仕方が無い。それではもう死んでしまったのですね」
敢えて追求しない警部の姿勢は、彼女の姿勢を真似ようとした結果である事を本人は知らない。だが、彼女はそれを見て少し微笑んだ。あまりにも的外れな誤魔化し方だが、心残りは少なかった。
「ありがとう……私を警察に突き出さないのか？　情報さえ与えないと？」
「はい。警視は本当にかっこよかったです。祝品、楽しみにしてますよ」
「……了解。くれぐれも死なぬようにな」

「霧花姉さん」

彼女が元警視である事は、警察には一人にしか知らされていない。

なぜか？　それは彼女の三つ下の弟と共に犯罪者として暮らしているからだ。

『史上最悪最善姉弟』おわり

第市話　螺旋状の絡まり体（前書き）

第市話　螺旋状の絡まり体

「だから、影響を与えちゃ駄目って言ったでしょ！？　もう、霧咲。能力が無くなって姉さんも死んだら、あんた何を食べるの！？」
「霧花姉さん、ちょっと警視だった頃より怖くない！？　分かった、もう一度作り直すから！」
玉子焼き一つ、ろくに作れない弟を見て霧花は大きな溜息を吐いた。
能力に頼っているのか、手を使うように能力を使っているのか。
――霧花の“能力”、と呼べるものは一つ。上空への飛行が得意なのだ。例えば常人が一メートル上に飛べるとすれば、彼女は五メートルから八メートル辺りまで飛べるだろう。
だからこその、“空中の殺戮者（スカイスレイヤー）”。

「姉さん？」
「う、ううん。何でも無いわ」
霧花はにこりと笑みを見せる。その時、チャイムが鳴った。
出たがる霧咲を置いて、霧花は迷いも無く玄関を開ける。
そこには、何故かセレリスが立っていた。
「……あ、あの時の……女の人」
霧花が出て、少し驚いているようだ。
「あら、珍しいわね。一ヶ月ぶり？　霧咲のストーカーが止んで、ほっこりしてる頃だと思ったんだけど」
「落ち着いたらまた会いに行くから、って言われましたけど。橘霧咲、います？」
「セーレーリースー！！　住所教えといたけど、ほんとに来てくれるとは！　俺、嬉しいって！　ちょっと悲しくなった？　なぁなぁ」
「う、煩いっ」
奥から出てきた霧咲をセレリスは睨みつける。

「あんたが六王子マンションに住んでる事がびっくりよ！　どんな金持ちマンションだと思ってるの？」
「豪邸のセレリスには負けるけどね」
「私の家を知ってるわけ……」
「有名じゃないか。ニコレッタ邸って」
「……」

今日のセレリスの格好も、また魔女の格好だった。テレポートで来たのだろう。
少し三人で喚いた後、霧花の玉子焼きを食べる。目的を忘れかけていたセレリスだが、次第にそれを思い出した。

「そう、そうよ！　あ、あたし……」

第市話　螺旋状の絡まり体（後書き）

短いけど一話はここで止めときますね。のんびりのんびり。

第丹話　説明不足の姉三昧

セレリスは大慌てで説明した。
「いつも通り、リバースを追いかけてたんだけどね。……そのリバースが、つ、捕まっちゃったのよ」
「――捕まった？」「リバース？」
霧咲の声と、霧花の声が被る。
リバースを知らない霧花に、霧咲が簡単に説明した。
「一日そこにいれば、そこを石に変えてしまう脅威の能力の持ち主。まぁ子供だし、気性が優しいのが幸いだけど」
「そうなの」
霧花は納得してから、えっ、と声を上げた。
「じゃあ捕まったら危ないじゃないっ」
「そうなの。西の方の、クラクス町にある工場に閉じ込められるようなのよ」
「なんで閉じ込められるわけ？」
霧咲が尋ねると、セレリスは言いにくそうに俯いた。
だが躊躇っている時間が無いと踏んだのか、すぐに顔を上げる。その格好がまたも気に入って、霧花は話に乗ろうと考えた。
「石になろうとなってるところを、見られたのよ。だから、リバースがそういう道具を持ってるのだと勘違いされちゃって。リバースごと戦争に使おうか、ってなったの！」
「はぁ、成る程な。馬鹿のやる事だわ」
溜息交じりに霧咲は言う。
「でもさ、セレリスはリバースを嫌ってたじゃん。なんか、復讐する！　みたいなさ」
「私は！　本を石にされたから怒ってるだけよ！　一発殴れればそれでいいわけ！」
キッ、とセレリスは言い返す。

頭に血が上っているようだ。
「人が死んで、私が落ち着いて笑っていられるとでも思ってるの！？　まったく、馬鹿ね！」
「セレリス！」
そこで霧花は叫んだ。
弟が無茶苦茶に言われてるのも頭にくるが、セレリスの無思慮ぶりが気になる。
霧花は諭すように言った。
「ものを頼む時の態度が、それ？」
「あっ……。ごめん、なさい……」
一転して静かになるセレリス。
だがすぐに調子を取り戻し、凛とした声で言った。
「今は、運ばれてる最中みたいなの。着くのは、明日だって言ってたわ」
「じゃあ、明後日にはクラクス町は石になってるな」
霧咲はさらりと言い、フライパンを乾燥機に突っ込んだ。だがすぐに、フライパンは自然乾燥だと霧花に怒られ、慌てて出す。
それを見て、セレリスは拍子抜けした。
「ど、どうでもいいの……？　命が消えるかもしれないっていうのよ、悪ければリバースの命とクラクス町の住人全ての命が……」
「他人の命なんて関係無いわよ。だって私は殺戮者だし。過去に多くの人の命を奪ってるのよ」
そう言って霧花はエプロンを椅子に掛けた。エプロンの下は、動きやすそうなジーンズと長い白Tのみ。その白Tをジーンスの中に押し込み、ベルトで止める霧花。その後、壁に掛けてある黒い革ジャンバーを羽織った。かなり、似合う。
「過去に奪ってるって……それは、そう、だけど」
セレリスはうっ、と詰まってしまう。
一人では、助けに行けない。だが、みすみす殺してしまうのも嫌だ。

優しい娘を見詰めながら、霧花はいつも通り、ナイフが大量にぶら下がっているベルトを革ジャンバーの中に装備する。
「まぁ、それを言うなら俺も手伝いしてる事になるもんな」
あっさりと霧花側の発言を霧咲は言う。それでセレリスは縮こまってしまった。
霧咲は苦笑しながら、エプロンを外す。そしてパッと立ち上がると、すでに服はあの悪餓鬼風なジャケットと、迷彩柄のズボン。能力を使ったのだろう。よく見てみると、その悪餓鬼風なジャケットは姉と同じ黒の革ジャンバーだった。着る人によってこうも印象が変わるとは。
ピンク色のピアスをしっかりと確認し、霧咲はもう一度ドスンと椅子に座った。
セレリスはその前で硬直している。
しかし、霧咲は別の事を考えていた。それを安易に口に出す。
「あ、ピンクピアスしてくれてる」
「は？　え、あ？　うっうん！　た、ただのお洒落だからっその、深い意味は無い、し！」
セレリスは大慌てで左耳を隠す。
だが霧咲は嬉しそうに微笑むだけ。
その後ろで、茶色い腕輪に右手を通していた霧花は、小さく溜息を付く。そして、玄関まで近付いて靴を履いた。
それを見て、セレリスは立ち上がる。どこか泣きそうな顔だ。
「あ、出掛けるんですね……じゃあ、私は、これで。迷惑掛けて、済みませんでした」
「ちょっと待て」
霧花は眼を丸くして振り向いた。
「あんた、どこ行くの！？　私達無視！？」「え、セレリス。一人で行くってどこに？」
何故か霧咲と被り、何を言っているのかあまり伝わらない。
だがセレリスは俯いて言った。

「いえ、あの、だからリバースを助けに……」
「え？」霧花は尋ねる。「別々で行くの？　効率悪いと思うんだけど。あんたのその、時空移動（テレポート）なんちゃらがあれば楽でしょ？」
「そうそう、時空移動（テレポート）で皆で行こうぜ」
セレリスはその二人の言葉に驚愕する。

「でもさっき、他人の命なんて関係無いって！」
「そう、関係無いけど？」
霧花はあっさりと言ってみせた。
「私が助けたいから、助けるの」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4731k/

色　―color―

2011年1月14日12時55分発行